

飛鳥諸寺の調査

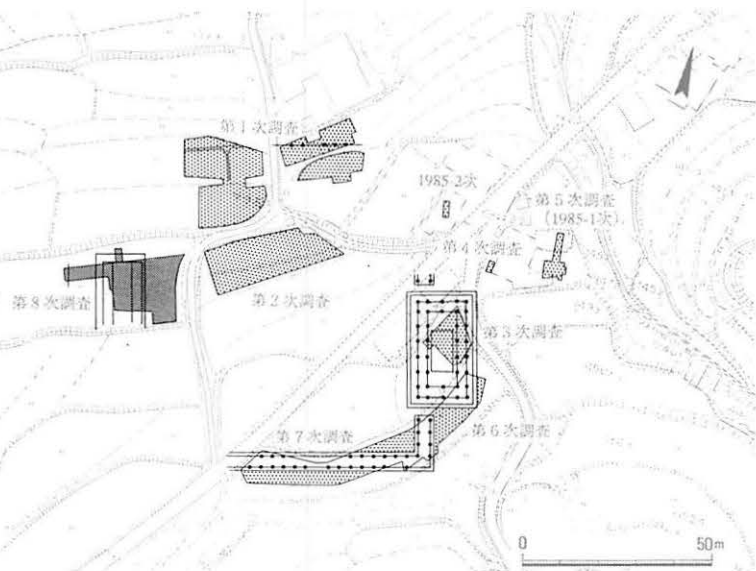
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1 坂田寺跡の調査(坂田寺第8次)

奈良時代の坂田寺の西面回廊が想定される南北里道に西接した水田における家屋新築に伴う事前調査である。検出した遺構は上下2層に分けられる。上層遺構には基壇をもつ掘立柱建物1棟(SB200)、それに伴う柱列2条(SA210・211)、土坑2基(SK198・SX213)、雨落溝などの溝3条(SD205・215・224)、基壇の縁石や溝の護岸などの石列8条(SX201~203・212・220~223)がある。下層遺構には土坑1基(SX226)、炉址1基(SX225)がある。

掘立柱建物SB200 調査区中央で検出した南北棟で、梁間2間の身舎の東西に庇がつき、桁行は6間以上である。柱間寸法は桁行・梁間ともに2.7m(9尺)等間で、庇も同様である。身舎の柱掘形は1.1×1.5mの長方形で、深さ約1.2m、柱痕跡は直径約20cmである。一方庇の柱掘形は身舎より小振り(一辺0.9×1.0m、深さ0.6m)で、柱痕跡の直径も15cmと細い。SB200は縁石を巡らせた基壇をもち、東・北・西辺(SX201・202・203)で確認した。縁石は直径30~40cmの自然石で、原位置を保つ北半の縁石基底部で測った場合の基壇東西幅は約12.8mである。建物から基壇縁石までの距離は、東で0.6m(2尺)、北で2.7m(9尺)、西で1.5m(5尺)と異なり、見かけの基壇高も一定しない。東辺では縁石の下底部は南が0.2m高く、東西は東が西より約0.5m高い。基壇上面が水平であった場合、基壇高は西北部で1.1m、東南部で0.4mと推定される。これらのことは建物の構造や正面観と関わる重要な点である。つまり西面が伽藍の正面だったのだろう。なお東庇の柱掘形は基壇縁石の下で検出された。

SB200内には南北柱列SA210と東西柱列SA211がある。柱穴は一辺0.8mの方形で、深さ0.4m。底に20~30cm大の石を置き、礎盤とする柱穴もある。SA210はSB200の身舎梁間の1/3の位置にあり、柱間は2.4m(8尺)等間。SA211の柱穴はSB200の身舎梁間を3等分する位置にある。これらは床東か。



坂田寺調査位置図(1:2000)

SB200の基壇内には北から一問目の身舎梁間間に土坑 SX213、石列 SX212がある。ともに基壇築成時に形成されたもので、性格は不明である。SX213は東西2.9m、南北1.8m、深さ0.5mで、下層に木炭細粒層が堆積し、その北端は基壇土の間に入る。木炭細粒層の上を覆う黄色粘土層中に SX212がある。石列は SB200の柱筋の方向に並び、30cm 大の石を2～3段積み上げる。

基壇縁石の外側には幅1m 前後で深さ0.3m の素掘りの雨落溝 SD205・215がある。

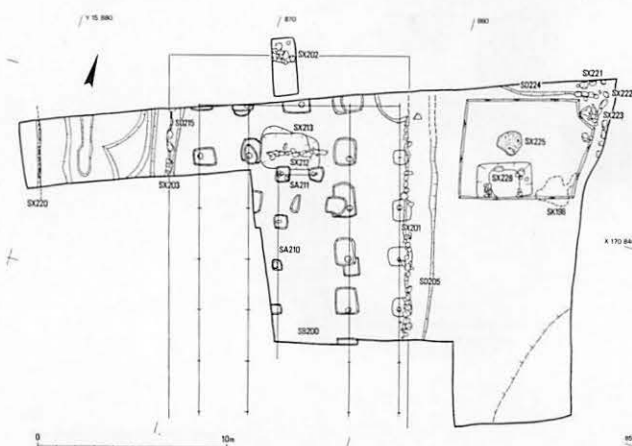
その他の遺構 基壇西縁石から西へ6.9m の位置に基壇に平行する南北小石列 SX220がある。その西側は0.35m 低くなっているため、幅0.9m 以上の南北溝の東護岸の可能性が高い。

基壇の東側には7世紀の瓦片、鴟尾を大量に含む黄灰色粘土の整地層があり、北で厚く、南で薄い。整地層上面から浅い不整形土坑 SK198が掘り込まれ、平城Ⅳの土器が多量に出土した。整地層の東端には東西石組み暗渠の側石 SX221・222があり、暗渠は西で素掘り溝 SD224につながる。石列 SX223は西に面を揃えて南北方向に並ぶ。その背面の積土層が第2次調査で確認した段状の盛土に類似することから、西面回廊の西側基底部の一部と考えられる。

整地層を一部で除去したところ、下面の灰褐色砂質土層上面で、下層遺構の土坑 SX226と炉址 SX225が検出された。SX226 東西3m、南北1.8m、深さ0.6m で、短辺と同一方向に並ぶ石列と埋土から投棄された石がみつかった。これは本来掘形の内側に石を積み上げ、内部に貯水などをする施設だったと推定される。SX225は直径約1.1m の炭化物層で、SX226と同一検出面に広がっていた。ただしその下面に長期使用を示す焼け面はなかった。

遺物 土器は7世紀前半から12世紀後半までの各種がある。土師器には灯明皿や坂田寺の法号「金剛寺」の省略と思われる「金」の墨書を残すもの(平城Ⅳ)がある。瓦は坂田寺式の重弁蓮華文軒丸瓦6型式など7世紀代の軒丸瓦を主体とする。また坂田寺B型式の鴟尾のほぼ全形を復元しうる各部の資料を得た。さらに「西廿六」と筭書きした埴もある。このほか土製小仏像の頭部破片や竹の節の表現がある小金銅仏の光背支柱が注目される。

まとめ 遺物の検討によって、SB200は8世紀前半代以降に造営され、10世紀代には廃絶された



坂田寺調査遺構図 (1:400)

といえる。この基壇の北縁は北面回廊の基礎とみられる石垣 SX210と揃うので、SB200は奈良時代の伽藍と併存していたと推定される。伽藍の正面を西と仮定すると、SB200は中門と南門の間に位置することになり、他の平地寺院と同様に考えることができない。その解明も含めて、坂田寺の寺域や伽藍の範囲の早急な確認が望まれる。

2 飛鳥寺の調査(飛鳥寺1992-1次)

この調査は住宅建設に伴い、飛鳥寺の塔の真東、伽藍中軸線から約140mのところで行った事前調査である。検出した遺構は、礎石建ち基壇建物(SB840)1棟、石列(SX852)1条、南北溝(SD860)、東西溝(SD845・862)2条などである。

基壇建物 SB840 基壇は0.5mの高さで、まず旧地表面から0.11mの深さまで掘り込み、15層前後におよぶ版築を行って築成されている。基壇の西面には石積みによる外装が残る。ただし調査の制約から東・北両面を確認できなかったため、基壇の規模は不明である。基壇上でみつかった礎石抜き取り穴から、建物規模は東西3間以上、南北2間以上で、柱間寸法は東西が4.05m等間、南北は2.85mである。礎石は花崗岩である。東西の礎石抜き取り穴の間には、凝灰岩小片を含む浅い溝SD842がある。凝灰岩製地覆石の抜き取り溝であろう。建物は北で西に8度の振れをもつ。なお礎石掘付け掘形からは7世紀後半の土器が出土した。

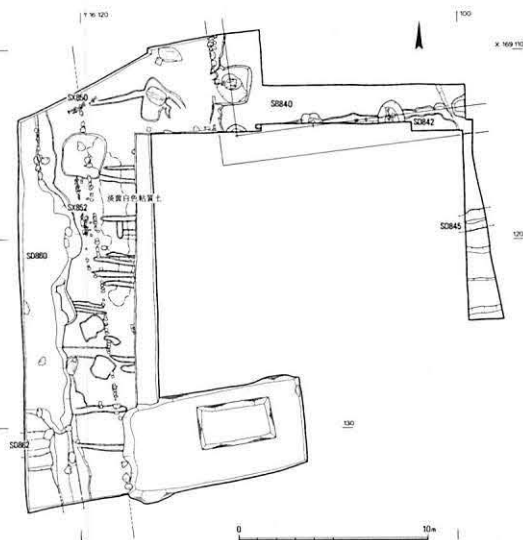
石列 SX850 SB840の西の柱位置から西に8.1m(27尺)のところにあり、SB840と同じ振れをもつ石列である。おそらくSB840の基壇周囲にあった犬走りの西側の見切りであろう。

南北溝 SX860 SB850から西に2.7m(9尺)のところにあり、東岸に石組の護岸の一部が残るので、本来は石組溝であった。溝幅は1.2m、深さ0.6mである。溝の埋土からは10世紀後半の土器が出土し、溝はこの頃まで機能していたことがわかる。

その他の遺構 SX850の西に瓦列SX852が平行してあるが、部分的にしか残っていないので、性格は不明である。東西溝SD862はSD860と直角に合流か分岐する。幅1.3m、深さ0.25m。調査区東辺で検出した東西溝SD845は幅1m、深さ0.25mの素掘り溝である。

遺物 蓮華文軒丸瓦Ⅰ・Ⅵ・ⅩⅢ・ⅩⅣ・ⅩⅦ～ⅩⅩ型式、重弧文軒平瓦Ⅰ・Ⅲ型式(今回五重弧文をⅢとし、四重弧文の旧Ⅱ・ⅢをⅡA・Bとする)などのほか整理箱240杯分の丸・平瓦が出土した点が注目される。

まとめ SB840は7世紀後半の築造で、柱配置からみて東門となる可能性は低い。これは寺域の東限を画する塀SA600より内側に位置するが、建物、SX850、SD860の振れはSA600とまったく同じであり、SD860で画された一郭があったことも考慮する必要がある。SB840の候補として、壬戌年(662)三月に道照建立とされる禅院が挙げられるが、断定はできない。SA600の延長線にあるはずの東門の確認など、寺域東限の確定は今後の重要課題である。(佐川正敏)



飛鳥寺東南部調査遺構図(1:400)